



## ✿ アンコール遺跡群での共同研究と西トップ寺院の発掘調査



カンボジア国旗

国旗の中央に世界遺産が描かれている国、それがカンボジアです。カンボジア国旗は政治体制の変化にもなって、その都度作り替えられましたが、常に描かれているのが世界遺産・アンコール・ワットです。

カンボジアでは9～15世紀にクメール王朝が繁栄します。アンコール・ワットは、その最盛期であった12世紀中頃（日本でいえば平安時代の末期）の王の墓です。クメール王朝滅亡後は、アンコール・ワットはわずかに地域の住民によって、その存在が知られるだけでしたが、1858年にフランスの学者アンリ・ムオーに「発見」されてから、世界にその名が知られるようになったのです。そしてカンボジア統合の象徴ともなったのです。このアンコール・ワットを中心とするアンコール遺跡群は、カンボジア内戦終結後の1992年に世界遺産に指定され、同時に危機に瀕した世界遺産リストにも掲載されました。そして、世界各国の研究チームによる国際的な保存修復が進められてきたのです。日本からも早稲田大学を中心とした日本国政府アンコール遺跡救済チームや、上智大学を中心とした国際調査団が、現



西トップ寺院での共同発掘（2003年8月）

地で活発な活動をおこなっています。

文化庁は1993年にアンコール遺跡の保護を目的とした共同研究事業を発足させ、実際の事業実施を私たち奈良文化財研究所が担うことになりました。当初は早稲田大学や上智大学など先行調査隊の協力によって、12世紀末の中規模なヒンドゥー教寺院バンテアイ・クデイでの遺構探査や当時の日常用陶器を製作していたタニ窯跡群の発掘調査をおこなってきました。

昨年度からは独自のフィールドとして、アンコール・トム内の小寺院、西トップ寺院を選び共同研究をおこなうことになりました。アンコール・トムは、クメール王朝の王宮を中心とした都城で、3km四方、濠と城壁で囲まれた壮大なものでした。私たちは、昨年度に現地文化財保護機関であるアプサラとの覚書に調印、2005年度までの4年間で第1期計画期間としました。この共同研究は、考古学を含めた総合的な調査をおこない、この寺院の長い歴史を明らかにすることが第一の目標であり、同時にカンボジア側の人材育成に貢献することも目指しています。

本格的な調査活動を開始したのは今年度になってからで、8月下旬に最初の発掘調査をおこないました。今回の調査では、遺跡全体の基礎構築の様子を知るため、伽藍南半部に東西3m、長さ11mの調査区を設定。調査の結果、中央祠堂から東へ延びるテラスと伽藍を囲むラテライト石列は、14世紀以降の中世期のほぼ同時に構築されたものであることが明らかになりました。しかし、中央祠堂に関する基礎構造が把握できなかったため、今回は中央祠堂に近いところで調査をおこなう計画です。

文化遺産の保存や調査に関する国際共同事業には、それなりの困難や苦勞をとまいません。そうしたなか、緻密な調査とともに現地の人材育成に重点を置いた私たちの取り組みは、高く評価されるものと自負しています。（飛鳥資料館 杉山 洋）